

花菖蒲の育種のポイントについて

一江 豊一

この原稿は、平成 25 年 10 月 8 日に開催された秋の研究会における一江豊一氏の講演を事務局において編集したものです。

□ □ □

はじめに

花菖蒲園に勤めて今年で 37 年になる訳ですけれども、それこそ学校を出てすぐに花菖蒲園の方に勤めました。けれども花菖蒲を花菖蒲園に入るまで全く見たことがない状態でした。ですので、全く知らないのもまづいかなと言うことで本屋に行って、富野先生が出していたカラーブックスの「花菖蒲」を一応買って、一通り見たという状態で花菖蒲園に入ったというわけですので、本当に何も知らない、ずぶの素人もいい所からスタートしました。そのような状況ですので最初の 10 年ぐらひは花菖蒲を勉強するというで明け暮れたということです。

1 助走段階の 10 年

(1) 花菖蒲の品種判別

まず最初に品種のことが分からないので、名前は違っているんだけど、こっちの品種とこっちの品種がどう違うの？と言うことが分からない状態からスタートしたので、一年目は、これじゃまずいよなという風に思いました。二年目からは、よくよく見てくると、同じラベルで、当時花菖蒲園は、列で花菖蒲を植えてありましたが、一列同じ品種じゃなければいけないんですが、よく見ていくと違う品種がいっぱい混じっているんですよ。それで、それを整理するという意味と、そういうことで花をよく見て回るということをすれば品種も覚えるだろうということで、二年目からは品種の混じり直しを一所懸命やりました。

そうしていくと、最初のうちは花が完全に咲かないと判別付きませんでしたけれど、そのうちに段々要領が分かってきて、蕾の色がちょっと見えた状態で、ああこれはちょっと色が違うとか、もうちょっと進んでくると蕾の形自体が違うよなど、段々わかるようになってきて、品種のことも覚え



ていきました。

もともと花菖蒲園に勤めるというきっかけというのは、自分自身が高校のころから遺伝ということに興味があって、そういうことに関する仕事に就きたいなということがあって、大学も農学部で育種研究室で学びましたので、品種改良も担当するというで花菖蒲園にお世話になりました。

(2) 取扱い数量の限界

最初の方は品種名もわからない状況で交配してますので大した良いものも出ずというところですし交配していて実生を見るとね、これもいいなとかこれもちょっと変わってるなとか、あるいはこれはたいしたことないけども、ひょっとしたらこの後で良いものが出るかもしれないなということで、最初のうちはやたら数を残したくなるんですよ。それをしていって、ふっと気が付いたときに、結局、扱える数には限度があるんですよ。だから自分が扱える数に限度があるなかで中途半端なものを沢山残していくと、中途半端なものを管理するだけで手いっぱいになって、次の交配ができなくなる。そのことに後になって気が付きまして、それじゃまずいなということで、そうならないようにするためには選抜の方をしっかりとしなければいけないし、扱える数にも限度があるから、なるべく効率の良い組み合わせを考えていかないといけないなということに気が付くのに十年くらいかかりました。

(3) 分離の記録は写真で

一番最初のころは、花菖蒲がどういう格好で次の世代に色んな性質が遺伝して

いくのかっていうことに自分自身が興味ありました。また、改良するときにも必要だなということで、記録をだいぶとりました。

記録に関しては、今は、デジタルで写真をとればそのまま残せますけど、当時はまだデジカメというようなものがなくて、全部フィルムでしたので、やたら写真を撮ると、それはコストがかかってきたので、そのあとでは、野冊に紙を挟んでそれに記録するというところから始めました。それでやっていくとちょっと時間がかかるので、その次の段階では、小型のテープレコーダーを持って自分で一つずつ花の特性を言葉によってそれを録音しといて夜になってそれを帳面に書き出すということもやりました。ただ、それをやるとね困るのはね、時々お客さんが話かけてくるんですよね、やってる最中に。それがちょっと困りました。

現状では、デジタルで写真とっておいて同じ組み合わせの親を撮ってやると、組み合わせによって色んな色が出るやつもあれば、分離はするけども変異の範囲が限定されてるものもあり、ほとんど同じやつばかり出る組み合わせもあるというのが調べると分かって来るので、そういうのを踏まえて交配の計画を立てるようにしています。

2 花菖蒲の殖性など

(1) 基本的に他殖性

花菖蒲に関してですが、「神路の誉」、
「紫衣の誉」という花菖蒲が私が作出した中では一番古い品種にあたるものです。これに関しましては、自分でこうすればこうなるだろうということで作出した訳ではなくて、社長の方から言われて「ヴィジュエルド・モガールみたいに艶のある品種がもっとたくさん欲しい」と、「あれは花はいいんだけどちょっと作りにくいし殖えにくい花であるから」ということを言われたので、そういうことを候補にしていた中から拾ったということなので、どちらかという社長（加茂さん）の言われるままに交配したものなのかから拾ったという感じです。

花菖蒲は、基本的に他殖性ということがありますけれども、その辺のところは、植物の種類によって、稲みたいに自分の



紫衣の誉

花粉で種子が着いて同じ品種がキープされていく植物と、そうじゃなくて割と自然の状態にしているても他の品種との交雑が多くて、バラエティがキープされる植物があります。

花菖蒲の方はどちらかという他殖性に近い、自殖もしますけれどもセルフでやってもちゃんと種もつきますし、遺伝的に不和合性みたいなこともないんですが、良く見ていくと、雄蕊の方は花が開花するとその時点で開薬してて花粉が出る状態になっているけども雌蕊の方は一日目は閉じていて、それが二日目になると柱頭が開いてきてそのところに花粉がつくようになっていくという、若干のずれがある訳ですよね。オーバーラップはしてますけど。

それから、花の構造から言っても、花菖蒲の場合は、花菖蒲園でいうとトラマルハナバチみたいなのが非常によくついて、それが媒介しているんですけども、そのハチの入り方なんかによっても雄蕊よりも先に柱頭が虫の背中に触る格好になっていて、虫の背中に既についている花粉が雌蕊に着くということで、どちらかという、花の形的に言っても他殖になるようになっていくように思います。

それと交配していく中で、同じ花の花粉を同じ品種に交配するというのをだいぶやりましたけれども、自殖すると必ず親より弱くなるというのがかなりはっきり現れてくるのかなという感じがします。

(2) 継続は力なり

継続は力なりということでやっていくと、下手な鉄砲は数撃てば当たることもあるけれど、当たらないとは言いませんけれども当たるとは限らないと。それよりもやっぱり、撃つ時もやたら撃つんじゃなくて普通のピ

ストルで撃つよりも照準器のついたピストルで撃った方が命中率が高くなります。

狙う目標によっては、一回かけただけでは絶対にでてこない組み合わせみたいなのもありますので、そこのところは一回交配して良いものが出なかったから、あきらめてしまうのではなくて、それを継続してその後どう続けてやっていくかということが良い品種を作る秘訣かなと思います。

あとは継続してやっていくと気が付くことってあるんですよ。私自身は花菖蒲からスタートして色んな植物の品種改良をやらせて頂いてますが、思ったよりも共通点が多いです。だから花菖蒲で成り立つことは他の植物でも同じということが結構あります。基本的にどんな植物でも近交弱勢といって近親交配を繰り返していくと自殖を主にしてる植物であってもちょっと縁の離れたものをかけてやる方が、程度の差はあるけれど丈夫になる性質でありますし、遺伝の様式も同じだなという様なものが結構あります。

3 『植物の育成』で認識変わる

バーバンクの書いた「植物の育成」という本がありますけど、この本に出会えたというのが自分のなかで考え方を新たにするきっかけにもなったし、丁度この本を読んだのがスタートから10年位経って大して成果も出なかった頃にこの本と出会って認識が変わった部分があって、その後、成果が段々出てきたと自分自身では思っております。

バーバンクっていう人はそれこそありとあらゆる植物の品種改良をした人で、有名なのはジャガイモですね。バーバンク系統というのもやってますし、現在でもバーバンクが作った品種が主流になっているのは、プルーンですとかスモモのサンタローザという品種はバーバンクが作ったものですし、花の方ではシャスターデージーなんかも彼が作った品種です。あと、読んでいて意外だったのが、花菖蒲についても、バーバンクが作った品種が残っているわけではありませんが、花菖蒲の事も書いてあって、それには非常に遺伝的な変異が豊富な品種だということも掲載されています。

反対の意味で考えさせられた本に「サイエンティストゲーム」という本があります。これは科学者が名を上げるために教授が助手の

やった仕事を肩書きで内容を奪っちゃうという様な話、そういう学者の世界は自分には向いてないと思いました。これに対してバーバンクはジャガイモなんかはだいぶ儲かったみたいですけど、晩年は儲けた私財を全部投じてトゲなしサボテンの改良を一所懸命して、トゲなしサボテンなら砂漠でも生産性の高い農業ができると考えてされた人で、品種改良でどれだけのことができるかということに一生を費やされた人で、自分もできればそういう生き方ができればいいなと思って感銘を受けました。

4 雑種とハイブリッド

・『雑』の表すものは？（『純』の反対）
価値として、純>雑のイメージ

日本語でいうと交配したものの雑種という言い方をしていますね。雑種という呼び方とハイブリッドという呼び方ではイメージがだいぶ意味が違うとおもっていて、雑という言葉のなかには純粋じゃない、程度の低いものという、これは民族的なものではないかと思いますが、英語でいうハイブリッドの中には両者の良いところをあわせもったさらに良いものという意味があります。交配する時にはこれを意識すると良いんじゃないかなと思います。ちょっと縁の遠いものをかけた方が丈夫で作りやすかったり、遺伝的にも離れていまずので変異性もプラスになるということを常々考えながら交配をしています。

・ハイブリッドは、両者の良いとこ取り

系統にこだわる人もいるんですよ。伊勢系ならどれが純粋な伊勢系なんですとか、長井古種ならどこまでが長井古種だとかということにこだわると、花菖蒲自体の発展性も少なくなっていくんじゃないかと思います。

たとえば、菖翁さんから熊本の方に渡った品種が元になって熊本系というのが発達していきましたけども、菖翁から熊本に渡った品種は私は純粋な江戸系じゃなかったんじゃないかと考えていて、江戸系にプラスアルファされた状態のものが向こうに渡ってそれが熊本で花開いたのではないかと思っております。

菖翁の有名な品種の「宇宙」とか「霓裳羽衣」、「連城の壁」という品種と、熊本に渡って熊本系の元になった「立田川」とか「王昭君」だとかとは、ちょっと別の血が入ってやせんかなと思っていて、別の血はどういう

ことかという江戸系よりも大輪であるところとか花形的にも江戸系は受け咲きが多いけれども肥後系は深咲きもあるということで伊勢系に近いものが江戸系に加わって熊本系ができたのではないかと思います。

実際に遺伝的などころを調べたわけではありませんのであくまで推測ですが、実際菖翁が一時期、京都に転勤していた時期があつて、この時に地理的に近い伊勢系に近いようなものと触れ合つて、菖翁は間違いなく自然交配だけではなく人工交配をしていたと私は考えているんですけれども、そういった交配を行ったものが熊本に渡つて花開いたとあり得る話だなと思つています。

先ほども言いましたようなことがあるので、私の場合は、系統にこだわつて純粋の江戸系、純粋の肥後系、伊勢系というよりも、かえつて系統間同士の交配のものの方が良いものができるということで系統間の交配をたくさんやってきました。



立田川

これは花菖蒲に限らず、球根ベゴニアの品種改良もやったんですけれども、その場合はやはり、球根ベゴニアでも作っている国によって一番見せるかっこうで進歩しているのはイギリスの系統ですけれども、そこから発生してアメリカに渡つて改良されているし、その前に渡つたベルギーでは、球根をとるための系統もあったありして、それは球根が太りやすいやつを選別していたりして、球根ベゴニアの改良の時もあえてイギリス系統の同士で交配するのではなく、イギリス系とアメリカ系とかイギリス系とベルギー系とか、ドイツの立花とか花壇用として花の大きさはそれほどでもないけれど草の姿がいいとか花着きのよいものとかあつたりするので、そういういった系統で掛け合わせたりしました。これは雑種というイメージではなく、ハイブ

リッドとして双方の良いところをとるようにして性質も丈夫なものを作るということをしました。

5 平尾先生の教え ～理想は高く～

色々なことで平尾先生には非常にお世話になつたんですが、「花菖蒲銘花集」を加茂花菖蒲園で作つて花菖蒲協会監修ということで7集まで出したんですけど、一番最初は平尾先生がほとんど後ろの方（解説）を書いて、その次に加茂さんが書いて、その後に私の方にお鉢が回つてきて、解説を書いたんです。

その時に当時花菖蒲園としては早咲きの品種が貴重で、開園期間を長くできますので吉江先生の品種を大量に作つていた関係で吉江先生の品種を沢山載せたんですけど、吉江先生の品種解説のところで、私は「花型はいまいちだがとにかく早い」と書いたんです。そしたら平尾先生から赤ペンで修正したやつが戻つてきてそれには、「シーズンのスタートを飾るところから度肝を抜くような素晴らしい存在」と書いてありました。早くさえあれば花型は悪かろうがそれでいいんだっていうイメージが私にあつてそういう書き方になつたと思うんですけど、平尾先生からはそれじゃ駄目だよ、早いだけじゃなくてスタートするところから花菖蒲つてすごいな、きれいだなって思わせるような存在のものを作らないといけませんよというアドバイスでした。

6 交配計画の立て方

基本の考え方はハイブリッドですね。今までに全く無いものを作るという計画の立て方はあまりしてません。それは実際にやってみてもものすごく難しいし、狙つてできるものではないと言つた方が良いかもしれません。これまでになかったような真っ青とか真っ赤な花菖蒲とかね、そういう様なものはなかなかできないので、交配してるときには、覆輪で八重咲の品種なんかもだいぶ作りましたけれども、八重咲の品種はたくさんあるけれどもきれいな覆輪で八重咲のものは無いね、ということで目標として八重咲できれいな覆輪になつたものを作るということを考える訳です。

今度は交配の親を考えるわけですが、考えるときに花型の良い八重咲ときれいな覆輪の入るものを交配していく訳です。一つの例でいうと、「イマーキュリットグリッター」みたいなきれいな覆輪の出る品種が欲しいけど、花型が貧弱だから、「イマーキュリットグリッター」にかけて花型が良くなるようなものを選ぶけれども、花型が良いだけでは何でもいいのかということではなくて、目的とするものが効率よく出てくるようなものを考えながら仕事を進めていきました。

まとめると、

- ・今までにない形質の組み合わせを考える
- ・目的に近い品種を選ぶ
- ・その品種に欠けている形質を拾い出す
- ・欠けている形質をもつ品種と掛け合わせる
- ・結果を見て次の交配を考える

7 世代を重ねて

最初のころは「イマーキュリットグリッター」が良いと思って交配に使っていたんですけども、これといってきれいな覆輪が次の代に出てこないのですね。当時は平尾先生から交配した種子を送って頂いたり、吉江先生の所は長野の方で花の時期がちょっと遅れますので、先生に相談して早咲きの開花時期に加茂荘から色んな形質を持つ遅咲きの品種の花粉を送って交配してもらった種子を加茂荘に返してもらうということをやっていたんですね。

その中に平尾先生から送って頂いた種子に「イマーキュリットグリッター」と「澄心」をかけた種子が入っていたんです。その種子を播いてみたら、その子供は一本残らず全部砂子でした。これはどういうことかな、とよくよく考えて、あと砂子の品種はどうかと、みってみると「京舞」のように砂子の品種は殆んど縁に白い覆輪が出るんです。ひよっとすると白と白覆輪の関係でいうと、白覆輪の遺伝子が2つ入ってホモになると白い覆輪が出て、ヘテロの状態になると砂子になるのかなと思って「イマーキュリットグリッター」と「澄心」をかけたやつにもう一回かけ戻したら覆輪が出たんですね。

そういったことから類推すると、覆輪ではなくても砂子で花型の良いやつを交配の中に入れてくれば、良いのができるかなと思って「京舞」を交配に入れてできたのが、「銀の詩」や「銀の琴」です。このようなことをき



銀の琴

っかけにして継続してやっていると見えてくるものがあるということにつながります。

それが次のステップに進めるということですから。覆輪の八重咲ということで交配していったのが、「虹の羽衣」で、「月の羽衣」がその前の世代です。一番最初は何処からきているかということ、「月の玉川」と「フレックルド・ゲイシャ」で、直接の交配ではないですけどもこれらからできたのが「花寿」という品種です。これに「千鳥」とかけて覆輪の八重咲を作ろうとしてできたのが「月の羽衣」で、「白扇」という伊勢系の品種と実生で「月の玉川」みたいなものをかけてできたのが「千鳥の舞」ができたんですが、どうして覆輪の品種と「白扇」という白色の品種をかけたのかということ「白扇」には三英の鉾にきれいに覆輪が入っているんで、ひよっとしたら覆輪の良い要素が入っているんじゃないかと思って「千鳥の舞」ができ、それから

「夢の羽衣」ができたということで、少しずつ理想形に近づいて行ったのと同時に、例えばAとBを交配したものを自殖するとAとBの良い性質を併せ持ったものが何らかの割合で出ますが、そういう交配はほとんどしてません。なぜなら花菖蒲は基本的に他殖性なので、それを維持しながら特定の形質を集積していくのでそれに関連がありそうな種類をいくつも使っていきながら仕事を進めていきました。

8 効率を高める工夫

(1) 別の組み合わせを複数考える

まず、同じ目的で、別の組み合わせを複数考えるということです。スタートのところが覆輪の品種がいっぱいあるし、八重咲

の品種がいっぱいあるし、スタートのところで、三つ四つの組み合わせをやっておいて、その子供で近いやつができたなら、その近いやつ同士だけれども、別のところから来たものをかけてやると具合がよくなります。

(2) 袋かけの省略

次に、袋かけの省略があります。一番最初やってた時にはきちんとしたデータが残したいので袋かけをやっていたんですけども、どうしても交配できる数が少なくなるし、ビニール袋のようなものをかけると中が蒸れて温度が上がって結実が悪くなるので、花菖蒲の方もそうでしたし他の植物でも、ほっといても種子ができるという植物に関しては除雄だけはしますけどもそれに網をかけるということはやっていません。頻繁に虫が来るようなところではその辺を考えなければいけないんでしょうが、温室の中でやっているのと割合入ってくる虫も少ないのです。また、花菖蒲では、花卉（外花被）を取り除くということを徐雄や袋かけの代わりにしていました。

それに関しては本当に種子が付かないかということを検証したほうがいかなと思っただけで、比較的種子が付しやすい三英の品種を選んで開花してすぐで柱頭が開いていない状態で花卉を取り除いたのと自然に放置しておくのとを比較してみましたら、自然に放置したやつが60~70%の確率で種子を付けましたけども、花卉を取り除いたやつは200ぐらいやった中で2つだけ実が膨らんできました。それも実が膨らんでしまいましたが膨らみ具合も種が少ないと思われる変形したようなやつでした。

(3) 遺伝様式を理解する

遺伝様式を理解して交配組み合わせを考えるということです。ただし、最初は遺伝様式をきちんと調べて論文でも書けたらいいと思っていたんですが、学者ではなく改良家の道を目指すことに切り替えましたので現状で行くと1~10%くらいは目的としない交配の種子はあっても問題ないという考え方です。

きちんと特性を調べて次の交配につなげられるようになると、これは明らかに目的としてかけたやつの子供ではなくてどっから飛び込んだやつの子供だということも

分かりますし、かえって自分の思ってもみなかった交配が出てくるということもありますので、そこら辺はあまり固く考えずに仕事をしています。効率を高めるということで、遺伝様式を理解して交配を組み合わせを考え狙っていく方が確実に分離の確立が高くなります。

(4) 淘汰は段階を追ってなるべく早めに

花菖蒲をやっている頃はそんなにシビアにやってたわけではありませんが、現状はアジサイの方をだいぶ一所懸命やっているんですけども、アジサイの場合はまず種を播いて、移植するんですけども、移植すると生育の芳しいものと芳しくないものが出てくるので、芳しくないやつをピンセットでつんじゃいます。そうすると生育の旺盛なやつだけが残ります。次の段階でもうちょっと大きくなったものでは、木の姿なんか分かるんですよ。例えば枝が細くてひよろひよろっとしてて、これじゃ花が咲いても莖がしっかり立っていられなくて倒れちゃうよねっていう様なやつは花を咲かせるところまでいかななくても、若い苗の状態でわかるんですよ。だからそういうものもその時点で淘汰する。でその次の段階になると栽培していく中でやっぱり病気が起こったりする訳ですけど、病気が起こるやつも病気になるべくつかない方がよいということでは、やっぱりその時点で淘汰する。

かといって、病気に関しては放任しといて病気になったやつだけすてるということをやってますと、病気が蔓延してほとんど枯れてしまうということがあるので、最初のうちに発病するのを淘汰して、そのあと消毒をして、しばらくおいてそれでも発病してくやつを淘汰するというをしています。

あとはアジサイに関して言えば、冬の間には芽とび現象とあって、寒さと乾燥で花芽が枯れちゃう品種があるんですね。そういったやつも落としていきますんで発芽実生した90%くらいは花が咲く前に捨ててしまいます。今となつてはそれが正解だと思ってます。

そう思ってる理由というのは、花を見てしまうと捨てられなくなるんですよ。病気が付くとか莖が弱いとか繁殖が悪いとか、そういうやつは花が良くても結局は普及す

る品種にはなり得ないんです。一旦花を見て良いなと思ってしまうと欠点があっても捨てられなくなるんです。だから花を見る前なら思い切って捨てられるんです。

(5) 幅広い交配のために混合花粉を用いる

なるべく交配数をたくさんしたいということですので、交配するときによいようにすると交配をたくさん出来るかということ、母親と父親を同じ環境に持ってくるという方法もありますし、花粉だけパックの中に入れておいて、その花粉だけ持って歩いて、どんどんかけていくと花粉を寄せてくるより早いわけです。それとあと混合花粉を用いるというのは、例えばこれはという品種が10本あったとしますよね、これを相互に交配しますと大体50の組み合わせがありますが、50の交配をするのは大変だということで、それじゃ例えば10品種の花粉を均等に採ってきて、それを混ぜて10本の花にかけてやれば、10本の交配で似たようなことができるんじゃないかという様な事を考えると、持って歩く花粉の種類も少なく済むということで、特に早咲きの品種を交配したときにはそんなことをだいぶやりました。

9 花菖蒲・種間交配

～奇の世界と美の世界～

これも平尾先生の言葉なんですが、種間雑種に関しては、これは美の世界ではなくて奇の世界だなという様な表現を聞いたことがあります。確かにただ縁の遠いものをかかっただけでいうと珍しいという意味で価値があるけども本当に観賞価値があるか？というとなしかにそうだなといえますけど、当時自分としてはスタートとしては奇の世界だけれどもそれが美の世界までいけるところまでやっていたらそれもありませんか？と思いつつ一先懸命仕事をしてました。けれども今となっては考えてみると、その所で費やした労力と同じだけの労力を他の所でやっていたら、種間雑種ではなく花菖蒲の系統間交配の方で成果があがったんじゃないかな、というイメージを持っていないことはありません。

10 花菖蒲の遺伝様式

遺伝様式については、とりあえず自分でわ

かっている範囲でこれはさうだろうなというものについて書き出してみました。

(1) 早咲き品種

早咲きの方は割と遺伝性が強くて、早いやつをかけてやれば必ず一定の割合で早いやつが出るという印象があります。早い時に咲いた花粉を混合の状態ですべておいて、それを中咲きや遅咲きの花が良かったり色が良かったり配色のきれいなものにかけてやるといったことをしました。

(2) 六英（内花被の外花被化）は劣勢

六英というのは内花被が外花被と同じ形になったもので、それは三英に対して単純な劣勢です。

(3) 五三性（基本数の変異性）は劣勢

五三性というのは「五三の宝」みたいな基本の数が三、四、五、または六になったり七になったりすることもあるようですけれども、基本数が変異する性質に関しても単純な劣勢です。

(4) 台咲（雌蕊の外花被化）は優勢

台咲と書いてあるのは品種としては「八重勝見」がありますけれども、雌蕊が外花被になったもので、これは優勢です。

(5) 八重（雄蕊の外花被化）は？

八重咲は劣勢の様でもあり、優勢の様でもあり、状況によって変わるところがあります。

(6) 薄色は優勢？

色が薄いものは、遺伝子が1種類だけかどうかということところがちょっと疑問ですけども優勢的に出てくるところがあると考えております。

(7) 彩色パターンは白を基準に考える

彩色パターンは白を基準に考えると良い



五三の宝

というのは、色の覆輪に関して言うと、白の品種に覆輪の品種をかけると大抵の場合は50%ぐらい、ホモに持っていればほぼ100%覆輪が出ます。あと、吉江先生は花菖蒲よりも球根ベゴニアの方が交配ということでは一所懸命やられていて、ひょっとしたら球根ベゴニアにもきれいな覆輪が出ていてそこら辺の知識からきているのかと思って、球根ベゴニアも縁取りの品種を白や黄色をかけると花菖蒲と同じように出るんですね。先程言った、植物の種類が違っても同じ遺伝の仕方をするのは結構あるなということを思いました。

(8) ピンク (ペオニジン型) は劣勢

伊勢系に特有なピンク色 (ペオニジン型) については単純な劣勢であるということです。早咲きは優勢的というか、完全な優勢ではなく個別的に品種間でばらけがでるのかはわかりません。

11 一つの形質を展開する

一つの形質を展開するということですが、「五三の宝」をスタートにして「美吉野」をかけまして、それを自殖をしました。この結果はごくつまらない紅の覆輪三英ができました。それを当初の目的として「五三の宝」みたいな数が変わる性質でピンクのやつができないかということにかけてののですけれど、さらのそれを自殖しました、それで「桃天女」という六英の性質を持つピンクで基本数が変わるという種類ができました。それと同時に、「五三の雪」という種類に「舞子の浜」とか「千代の春」とか「碧鳳」をかけて色んな花が展開できるという様にやりました。

12 品種に関するエピソード

「初紅」という品種は「満月」(江戸系)に「舞妓」をかけたもので、白いやつに覆輪をかけると覆輪が出るんだよということです。「碧涛」という青紫の綺麗な品種があるんですけども、これに関しては実際に交配をしてみて次の世代から純白のものが分離してくるということが分かってくるということもありますし、この花自体を見ても芯がちょっと白いところと眼といわれる黄色い部分の周りにちょっと白っぽいところがありますよね。こういう感じで色が付くやつは白い遺伝子を持つということが結構ある。白い遺伝



五月晴

子っていうのは有色の遺伝子にカバーされちゃって見えないですけども、よくよくそういうところまで観察していくとそういうところが見えてくるという感じです。

あと、三英と六英の関係でいうと、通常は三英なんだけれど作りによって花弁が1枚だけ外花被みたいになって三英と六英の間みみたいになるやつってありますよね。そういうやつは大抵六英の遺伝子をヘテロに持っている。「八重勝見」っていうのは雌蕊が外花被になる品種で、これ交配してやれば同じような品種が出るんですが、昔からこの品種1つしかないのも、もっと改良に使うと良い品種だと思いつつながら、残念ながら雌蕊が花弁になってしまいますので母親として使えないんですね。花粉は正常に出ますので父親としては使える。そんな状況だけどもあんまり交配に使えないっていうのは、花の時期が遅いんですね。「八重勝見」がもっと早く咲けばその後には咲いた花と交配できるんですけど、本当に一番最後に咲いてくれるんで、なかなか交配ができないということです。

あとは純白で台咲のものを交配したことがあります。そしたら、台咲のものは咲いたけど全部砂子でした。ですので台咲と砂子にはリンケージの関係があるのかなと思いました。

あと色々やってく中でこれは変わってるなと思ったのは「五月晴」という品種で、こういうパターンの品種は殆んど思い当たらないというのと「五月晴」を自殖すると「五月晴」と同じものは一つも出ないんですね。全部六英の筋花になるので、これから考えると、周縁キメラというやつで本来は筋花の性質を持っているのだけれど、一番表層の部分が多分白だと思えるんですけど内部の遺伝子と表層の遺伝子が違っている周縁キメラという構造になっているのではないかと思います。